
魔法少女リリカルなのはS t r i k e r S バトスピと魔法の物語

ネガティブ妄想者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers バトスピと魔法の物語

【Nコード】

N8447S

【作者名】

ネガティブ妄想者

【あらすじ】

バトスピが大好きな二人の主人公、赤城空と白波大地。二人は自分の切り札から頼み事をされる。それはなのはの世界に散らばった？レアを集める事。スピリット化をする？レアに対抗するため、青年達はスピリットに変身する。その力を持ち、どうなのはの世界で生きるのか・・・
「行くぜ！アタックステップ！」
魔法少女リリカルなのはStrikerSカードの力を使いし者・・・
・始まります！

ほぼ会話文のみや文が主人公の呟きばかりと表現のみの駄文です。

それでも良い人は読んでみてください。あと文に文句があればください。あとタイトル変えました。

ブローグステップⅡ始まる物語（前書き）

こんにちは！ネガティブ妄想者です！

駄文ですが今度こそやり通します！

では、行きましょう！ブローグステップ！

ブローグステップⅡ始まる物語

「行くぜ！アタックステップ！ジークフリードでアタック！」

俺の名前は赤城空^{あかぎそら}

バトスピ大好きな高校三年生だ。

「甘い！オーディーンでブロック！」

こいつの名前は白波大地^{しろなみだいち}

俺と同じバトスピ大好きな親友だ。

「フラッシュタイミング！オフエンシブオーラ！」

「お見通しなんだよ！ディフェンシブオーラ！」

二人はマジックカードを使う。

「燃やせ！俺のジークフリード！」

「撃墜せよ！僕のオーディーン！」

二人が叫び合い、二枚のカードがぶつかり合う。
その時……

（ピカアアア）

「ジークフリード！？」

「オーディーン!？」

二枚のカードが光出す。

「ぬわ!？」

「そ、空……!」

二人はそのまま光に引き込まれ、意識が途切れた……

?

《……目覚めよ……》

声がして目を覚ます。

目を開けて、周りを見ると白い場所だった。
声をした方を向くとそこには……

《目覚めたか……》

《こちらも目を覚ましたようです》

龍皇ジークフリードと要塞皇オーディーンがいた。

《済まないが呼びださせてもらった、実はやってもらいたい事が……

》

「喋った！？喋ったよ！？空！」

いつの間にか隣にいた大地が慌てている。

「お、落ちつけ！そ、素数だ！素数を数えるんだ！」

空も慌てながら大地に素数を数えろと言う。

「わかった！1、2、3、4・・・」

「いや！普通に数えちゃってるから！」

《（ブチッ！）いい加減にしろ！！！》

（ゴンッ！）

「「痛っ」「」

慌てて話を聞かない二人にジークフリードは拳骨を喰らわせる。

《まあまあ、フリード、二人とも落ちついたようですよ》

「誰でも拳骨されたら黙るわ！」

《もう一発逝つとくか？》

「すみませんでした！」

切れて叫び散らす空にジークフリードが拳を見せ、黙らせる。

《よし！なら話をしよう》

《俺は空の切り札、ジークフリードだ》

《私は大地様の切り札、オーディーンです》

二人が名乗る。

「それは良いけどここは？」

《ここは私達？レアが生きる世界です》

「なんでこんな所に呼びだした？」

空が聞く。

《あなた達は私達が？レアである事はわかりますね？》

「うん」

二人が頷く。

《その？レアが何者かによって七枚、ある世界に飛んで行ってしま

ったのだ》

《あなた達にはそれを集めて欲しいのです》

「「はい？」」

カードを集めると言う言葉に拍子抜けする。

「カードを集める？」

「そんな簡単な事を？」

《いや、集めるのは集めるんだが・・・》

《その世界ではカードがスピリット化してしまうんです》

二体がニコニコ笑いながら喋る。

「ってニコニコしてる場合じゃねえだろ！」

「なんだよ！？カードがスピリット化する世界って！？」

ニコニコ笑う二体に二人が突っ込む。

《とりあえず・・・その世界でスピリットが暴れたら大変だから集めて欲しい訳です》

「いやいやいや！だからカードがスピリット化する世界って何だよ！？」

《リリカルなのはの世界だ・・・》

ジークフリードがさも当然の事のように言う。

「・・・・・・・・あ〜〜〜〜・・」

行く世界を聞いて納得する二人。

「確かになのはの世界ならありえないかも・・・」

「うん、なんでも有りだもんね・・」

《気合と根性でなんとかなるアニメだもんなwww》

《・・・ひどい言い草ですね、フリード・・・》

「でもなんでも有りアニメだからと言って俺らまでそうは無理だ
デバイスも無いし・・・」

《大丈夫です、空様。私達もデバイスとして協力します》

オーデインがすごい事を言う。

「マジで!?!?」

《マジです ついで言うとセットアップ時、私達の姿になります》

「マジで!?!?!?」

《もういいわ!?!?!》

さらに驚く二人にジークフリードが突っ込む。

《あと大公、デスペラード、タイタス、ヴァリエルの四体にも変身できる》

「「マジd《いい加減にしろ?》はい!すみません!」」

《つたく・・・次はこの四体の内、二体選べ》

《私達は元から決まってます。

空様はフリード、大地様が私ですね》

二人の目の前に緑、紫、青、黄色の四枚のカードが現れる。

「うゝん・・・どれにしよう・・・

大地はどれにする?」

「僕は紫と黄のカードになっみたいな」

ほら、僕って緑や青ってキャラじゃないだろ?」

いや、どんなキャラだよ!

「なら俺が緑、青で、大地が紫、黄色を選ぶ」

その言葉に反応するかのように四枚のカードが二人の手に渡る。

《・・・なんだろう・・・話がポンポン進んで行って逆に不安になる・・・》

「勝手に呼びだしといて何を言う」

《それもそうですね・・・

それでは次はデバイスと私達のカードを差し上げましょう》

そう言いながらオーデインが光出す。

《さつさとやるぞ》

ジークフリードも光出す。

光はそのまま二人の人差し指に触れ、いつの間にか指に指輪が嵌めこまれていた。

「おお、デバイスっぽい！」

《デバイスだよ！》

《あとカードとカードケースを渡しましょう》

さらに目の前から赤いカードケースと白いカードケース、さらにジークフリードのカード、オーデインのカードが現れ、六枚のカードとカードケースが二人の手に渡る。

《それとこのデバイスには規制があります》

「「規制？」」

《はい、変身する時はスピリットの名前を叫んでセットアップしないといけません》

「いちいち名前言うの?」

大地が聞く。

《はい、その方がわかりやすいですから・・・》

「・・・誰に対して?」

《もちろん読s y》さあ、次の説明だ!《それもそうですね》

オーディーンがメタ発言をジークフリードが思いつき伏せる。

《俺らの変身は一枚に対して一日に一回だけだ》

「うわ、不便だな」

《一日中植物状態になりたいならどうぞ》

「気をつけて使わせていただきます!」

オーディーンが文句を言う空に脅しをかけ、空は早急に態度を変える。

《説明はこれくらいですね。あとはカートリッジが無いくらいですな》

「え、無いの?」

《スピリットにカートリッジがあるわけないだろ・・・》

「それもそうだな・・・」

空は納得して頷く。

《それでは行きますか》

オーデインがみんなに語りかける。

「なら行く」

《レッツゴー》

白い世界が光る。

二人はカードの入ったケースを腰に掛ける。

「あれ？ところで・・・」

空が何か気になりジークフリードに聞く。

「俺らは元の世界に戻るんだよなあ？」

《すまん。戻れん。》

「「えっ？」」

そのまま呆ける二人と二機を光が包んだ・・・

？

光が消えると二人は森の中にいた。

「あれ、ここどこ？」

《ここは……どこだ？》

「知らんのかい！！！！」

《知るわけねえだろ！原作あまり知らねえよ！》

「知らねえのかよ！森の中って言ったら電車の時かホテルの時位だろ！」

《だから知らねえってんだろ！！》

空とジークフリードが言い合う。

（ドカンッ！）

上から音がする。

空と大地が気になり上を見る。

上を見ると桃色の砲撃が放たれていた。

「……なあ……あれってなのはディバインバスター？」

「・・・だよね?・・・」

(ガサッ)

さらに前から音がする

そっちを見るとガジェットが三機くらいいた。

「・・・・・・・・あの・・・・いきなり戦闘?」

(キュイイイン)

ガジェットが何か撃とうとする。

《戦闘する気満々ですね》

「「気楽に解説してんじゃねえええ!!!!ってあぶなっ!」」

ガジェットの攻撃を二人はギリギリかわす。

「仕方ねえ、戦うか!」

《ならカードスキャナー展開って叫べ》

「セットアップじゃないの?」

《それは変身する時だ。まずは準備だ》

ジークフリードが説明していなかった部分を話す。

「お願いだから説明はちゃんとして?」

《いいから叫べ。死ぬぞ》

「何言つて・・・うおっ!!」

さらに攻撃をかわす。

「空!言うしかないよ!」

「仕方ない、」

「カードスキャナー展開!」

二人が叫ぶと指輪が光り、腕にデバイスみたいなのが巻きついて
いた。

「えっと・・・これがデバイス?」

《そうだが何か?》

「「どっからどう見てもデバイスだろおお!!!!」」

《ピンチなのに突っ込みできるあなた達はすごいですね・・・》

《いいからさっさとカードをスキャンしろ!穴あるから穴!》

「くっ・・・もうなるようになりやがれ!!」

空が自棄になり、叫ぶ。

「行くぞ！！大地！！！」

「何か納得できないけど・・・行くよ！」

二人は腰にあるケースに手をかけ、カードを引く。
そのままデバイスにセットする。

「スキャン！カードセット！ジークフリード、セットアップ！」

「スキャン！カードセット！オーディーン、セットアップ！」

《《セットアップ！》》

カードが光を放ち、空達を包む。
光が晴れると・・・

「うおおお！ジークフリードになつてる！」

「これがオーディーンの体・・・」

空と大地はジークフリードとオーディーンの姿になっていた。

「これで戦える！行くぜ！雑魚共！」

「空・・・そんなに調子に乗らない方が・・・」

大地の話も聞かずに空はガジェットに殴った。
ガジェットは無残に潰れた。

「これがジークフリードの力・・・燃えてきた〜！！！」

《そうだろう！行くぞ！俺らの力を見せてやるっぜ！》

「まかせとけ！」

「先が思いやられる・・・」

《私もそう思います・・・》

なんだかんだで空達の初戦闘が始まった・・・

ブログステップⅡ 始まる物語（後書き）

主人公がジークフリードになったりオーディーンになったりしたら面白そうですね。

だから書いてみました。

表現ヘタですが頑張ります。

では、次で会いましょう。

ネタバレステップⅡ設定（前書き）

作者「主人公達の設定だ〜！」

空「かなり不安だ・・・」

作者「だいじょ〜ぶ！かなりマジで書いたから！デツキ作りながら〜！」

大地「本気で不安だ！」

作者「うるさい人は放つとして、主人公、デバイス設定です」

ネタバレステップⅡ設定

主人公設定1

名前：あかぎそら赤城空

性別：男

性格：何にでも真つ直ぐに行動する熱血タイプ。

困っている人を見るとすぐに駆けつけるほどのお人好し。
デッキも熱血な為、赤のデッキ。

好きな物・事：バトスピ 赤色 龍皇ジークフリード 辛いカレー
歌（バトスピ関係）

嫌いな物・事：悪い事 怖い人 人を見捨てる人

容姿：髪は黒髪 顔は中の上（顔イメージはれい×ばとのあつき
ー）

魔力値：ジークフリードのおかげでAAAランク

魔力光：使うカードにより変わる。

（ジークフリードなら赤、大公なら緑、タイタスなら青）

備考：小さい頃に特撮ヒーローものを見過ぎて、熱血に生きるようになる。

大地とは小学生の時に会い、意気投合して親友に。
中学時代に変な二つ名を持つ（かなり厨二くさい）

高校生になり、バトスピを大地に誘われやる事になる。
そしてある人と赤のデッキに出会い、バトスピが生きがいになった。

歌は時々歌う程度。泣いてる子を見ると速攻で歌う。
リリカルなのはの知識はあるが細かいところまでは覚えていない

デバイス設定 1

名前：ジークフリード

AI：男

デバイス：インテリジェントデバイス

待機状態：赤い宝石が嵌っている指輪

形状：カードスキャナー【赤色】（形はデ マーズのデ バイスだがスラッシュさせず、

カードを差し込み使用する）

性格：短気でよく空に切れるが、サポートや助言する優しさもある。

備考：空の切り札のスピリット。空を呼び出したスピリットの一体。
オーデインとは仲が良いが、喧嘩もする。
バトスピでいつも大地に負ける空に不満を持っている。

変身するスピリット設定 1

龍皇ジークフリード：赤の？レアカード。能力は炎を体の一部や全身に纏わせる能力。

翼はあるが魔力で飛べるので必要はあまり無い。

必殺技：『ジーク・ブレイク』 右腕に魔力を込め、敵を殴りつけ魔力を爆発させる技

『ジーク・ストライク』 炎を全身に纏わせ、敵に激突する技

『龍皇紅蓮竜牙』 ???

キングタウロス大公：緑の？レアカード。能力は全感覚を最大限にアップさせる能力。

狭い場所で戦う事を得意とする。六本足で歩き難そうだが滑るように歩く。

（アメンボークみたいな感じで）

必殺技：『大公一閃』 獣槍ゲイボルグに魔力を込め、敵を切りつける。

切れ味は殺傷設定のレヴァンティンと同等。

『大公の剣』
獣槍ゲイボルグを大剣化させ、敵に切りつける。

英雄巨人タイタス：青の？レアカード。能力は敵の魔法を粉碎する能力。

能力は強いが魔力の消費が半端なく高い。瞬間

移動が可能。

接近戦を得意としていて、遠距離攻撃をする敵にも瞬間移動で距離を詰めれる。

必殺技：『タイタス・ナックル』 拳に魔力を込め、敵を殴りつける。

魔力を相殺する事も可。(S L

Bは不可)

『タイタス・リボルバー』 拳に全魔力を込めて敵を殴り吹き飛ばす技

全魔力を込めるので、使うとすぐ戦闘不能になる諸刃の剣な技。

主人公設定2

名前：白波大地

性別：男

性格：物事を冷静に判断する冷静タイプ

何かが起きると冷静に判断し行動する。でも突っ込みだけは思いつきり弾ける。

勝負事も好きで勝つのが普通と言うほど。負ける時もしばしば。

デッキは冷静に判断ができる白デッキを使う。

好きな物・事：バトスピ 要塞皇オーディーン バトル あめ玉
勝負事

嫌いな物・事：負ける事 人が死ぬシーン 偉そうな人

容姿：髪は茶髪 顔は中の上（イメージはこれゾ の歩）

魔力値：オーディーンのおかげでAAA

魔力光：空と同じで、カードによって色が決まる

（オーディーンなら白、デスペラードなら紫、ヴァリエル
なら黄）

備考：小さい頃に父親に勝って褒められて勝負事が好きになる。

空とは小学生の時に会い、意気投合して親友に。

高校生でバトスピに出会い、空を誘った。

空には何やら恩があるらしいが・・・

リリカルなのはの知識は空と同じくらい。

デバイス設定2

名前：オーディーン

AI：男

デバイス：インテリジェントデバイス

待機状態：白い宝石が嵌っている指輪

形：カードスキャナー【白色】（ジークフリードと同じ形）

性格：いつも冷静で大地に尽そうとするが、無茶をするとひどく怒る面もある。

備考：大地の切り札のスピリット。空達を呼び出したスピリットの一体。

ジークフリードの事をフリードと呼ぶほど仲がいい。

勝負事が好きな大地の事を心配している。

変身するスピリット設定2

要塞皇オーデイン：白の？レアのカード。能力は防御魔法強化。

能力は自分にも他人にも使える。

しかし他人に使う場合は近くにいないければな

らない。

必殺技：『フルバースト・ショット』 全銃口から魔力弾を放つ。

『フルバーストブレイカー』 全銃口から集束型砲撃魔法

を放つ。

強力だが魔力消費が半端な

い諸刃の剣の技。

魔界七将デスペラード：紫の？レアのカード。能力は力の吸収。

敵の魔力・原動力を吸い取り、自分の物に

する事が可能

他人に渡すのも可能。

必殺技：『悪魔の一閃』 剣を持ち、相手を切りつける。

切りつけられた敵は魔力消費が通常の二倍になる。

大天使ヴァリエル：黄の？レアのカード。能力は魔力全回復。

魔導師の魔力一人分を全回復させる事が可能。

しかし、自分自身は不可。

能力は便利だが戦闘はできない。常にサポート側

必殺技：『フルリカバリー・マジック』 光を放ち、味方全員の魔力を回復させる技。

攻撃魔法ではないがサポ

ート魔法としては最強。

カードスキナー設定

形：デジ ンティ ーズのデ バイスの形だがスラッシュする所が差し込み口になっている。

さらに腕に巻かれている状態（腕時計みたいなのを想像したらわかりやすいかも・・・）

色：空が赤色、大地が白色

効果：登録された？レアをセットし、カードの名前を叫ぶ事でそのスピリットになれる。

しかし同じカードでの変身は一回のみで、

もし変身してしまうと一日植物状態になってしまう。
(間違つて変身しても一回にカウントされる。)

カートリッジ：無し(スピリットに変身するため必要無し)

セットアップ時：それぞれのスピリットの姿。

大きさは普通の人よりちよつと大きい程度。

?レアカード設定(ネタバレ上等の人だけ見ていいですよ?)

龍皇ジークフリード

要塞皇オーデイン

キングタウロス大公

魔界七将デスペラード

英雄巨人タイタス

大天使ヴァリエル

暴双龍ディラノス

巨神機トール

蛮騎士ハ キュリー

魔界七将デストロード

機動要塞キャッスル・ゴレム

大天使ミカファール

魔龍帝ジークフリード

???

???

???

???

ネタバレステップⅡ設定（後書き）

空「・・・変な二つ名って？」

作者「禁則事項です・・・」

大地「僕・・・冷静タイプ？」

作者「建前上は・・・」

二人「駄目じゃん！」

作者「細けえこたいいんだよ！」

空「あと？レアの“???”って何だ？」

作者「秘密です。バレたら楽しくない。

・・・まあ、魔龍帝でわかる人もいるっしょwww」

空「駄作者のくせに何を言う」

作者「止めろ！感じるだろ！」

二人「変態だ！！！」

作者「うるさい！」

空「あとさ・・・何か・・・」

作者「ん？どつたの？」

空「弱点多くない？あとかなり単純なような・・・」

作者「タイタスとオーデインだけでしょ？

タイタスはヴァリエルと組みや良い。

単純なのは勘弁してくれ」

大地「僕の方は必殺技少ないか？

しかもヴァリエルがバトルできないって・・・」

作者「書いててこれで十分じゃね？と思ったんだ

あと黄色のカードってサポートイメージあるから・・・」

大地「なんだろ・・・わかってしまう自分が怖い・・・」

空「でも諸刃の剣は無いだろ・・・植物状態も・・・」

作者「チートじゃない主人公イメージはデメリットが豊富なイメージ
なのさ！！」

二人「そんなイメージは燃やして死んでこい！！」

作者「ハスルーしょ・・・皆さん？これで設定はわかりましたね？
では1話で会いましょう」

二人「無視してんじゃねえええ！！！！」

ファーストステップ」なのは達との対面・機動六課に協力！？（前書き）

作者「なんか文がテケトーな気がする・・・」

空「駄文作者なんだから仕方ないんじゃない？」

大地「そっだよ？駄文作者」

作者「そんなに駄文言うなよ」（泣）

空「駄文だから仕方ねーよ。諦めろ」

作者「ううゝ（泣）駄文ですけど読んでくれると嬉しいです・・・」

空&大地「「では第1話始まります」」

ファーストステップ」なのは達との対面・機動六課に協力!?

「オラアアア!」

「とりやつ!」

(ドガ〜ンッ!)

空と大地がガジェットに一発入れ、爆発させる。

「あれ?もう終わり?軽いねwww」

「あんまり油断しない方がいいよ、空」

《大地様の言う通りです。油断しないでください》

《ほんの二体倒して何調子に乗ってんだ、恥を知れ!》

大地とデバイス二機が空を攻めた。

「・・・すいませんでした・・・(シクシク)」

「少し周りを見た方がいいかも・・・」

「ならちよつと飛ぶか・・・」

「いや・・・飛べるの?」

《飛ぶ事なんて簡単ですよ?二人に魔力を渡しておきました》

「ちなみにどのくらい？」

空がオーデインに聞く。

《二人共AAAですね。》

「！？」

あまりの多さに驚く二人。

《だから空を飛ぶなんて簡単なのだ。さっさと飛べ》

「・・・なんかジークフリードが偉そう・・・」

「大丈夫・・・良い事くらいあるよ・・・多分」

話をしながら大地は飛ぶイメージをする。

「あ、ちよつと浮いた・・・」

「ずりずるいよ。俺だつて・・・」

《空は翼があるから楽だろ・・・早く飛べ、さあ飛べ》

ジークフリードが空を急かす。

「うつるさいなあ・・・行くぜ！」

(バサバサッ)

空が翼をはばたかせ・・・飛んだ。

「うおゝ、飛んだ」

空は飛べた事に喜んでいと・・・

《っ！？空！》

「なんだよ。ジークフリード？」

《強い魔力反応がこっちに来てる！逃げるぞ！》

「強い魔力反応？・・・いいねえ、強い奴・・・戦うぜ！」

《いや待て！魔力の正体はあのチート女だぞ！？》

「チート女？・・・誰？」

「なのはの事じゃないかな？」

なんとかコツを掴んで飛んできた大地が言う。

「何！？あの白い悪m（シュッ）のわっ」

白い悪魔と言おうとした空の頭を桃色の何かがかすった。

「・・・今のディバインシューター？」

《そのようです。大地様》

「えっと・・・俺危なかった？」

《口を滑らせるな・・・死ぬぞ？》

「以後気をつけます・・・」

空達が会話していると・・・

「時空管理局です。武装を解除して投降してください」

声がして、空達は振り返る。

そこに・・・

「投降しない場合は実力行使で取り押さえます」

そこに時空管理局の“エース・オブ・エース”
高町なのはがいた。

「なのはside」

空達がガジェットを倒している時、なのはは次元震が起きたポイントに到着していた。

「はやてちゃん、この辺りなの？」

『そのはずなんやけど？ほんまに何もないん？』

「うん。ガジェットが数体出てきたから倒したんだけど・・・」

『ガジェット！？』

はやてがモニター越しで驚く。

「うん。でもほんのちよつとだから楽だったよ？」

『なら大丈夫やな・・・』

なのはがはやてと話していると森の中から赤い竜が飛んでいた。

「えっ！？はやてちゃん！あれって・・・」

『待つて！なのはちゃん落ちつくんや。』

召喚魔法を使った形跡が無いから、幻覚かも知れへん』

「ならちよつと調査してみるよ」

『気をつけてな？なのはちゃん』

「任せて」

そう言つてなのはは通信を切る。

なのはは竜に近づくと今度はロボットのような物が浮いて来た。

「（変なの、召喚魔法が使われた形跡が無いのに竜やロボットが出てくるなんて・・・）」

なのはがそう思っていると・・・

「何！？あの白い悪m（シュッ）のわっ！？」

なのははいつの間にかディバインシューターを放っていた。

「（なんかイラッとしたの・・・でも声を出してたから人なのかな？）」

そう思いながら竜とロボットに近づき・・・

「時空管理局です。武装を解除して投降してください。
投降しない場合は実力で取り押さえます」

「なのはside end」

「空&大地side」

なのはに宣言された時、二人は固まった。
なぜなら・・・

「（え、ちょ、マジ？実力で取り押さえ？
つか何で竜の姿なのに人ってわかった！？）」

「（落ちつけ。落ちつくんだ僕！戦わないですむ手があるはず・・・）」

二人共、なのは「実力で取り押さえる」という言葉にビビっていた。

二人がビビっていると・・・

《すまねえな、白の魔導師よ》

ジークフリードが急に喋りだした。

《俺らは怪しい者じゃねえ、ただ目的があって行動しているだけだ。嘘だと思っならお前らの所に連れてって徹底的に調べてもいい》

「「「えっ!?!」」」

ジークフリードのいきなりの提案に三人が驚く。

「ちょっと待てジークフリード!何で!」

《その方が得策だと踏んだんだ・・・文句あつか》

「得策って言ったって・・・」

《大地様、フリードはカードを集めるため

なのは様に付いて行くのが得策だと踏んだのでしょっ》

オーディーンの説明で二人は納得する。

「え、えっと、では機動六課に来てもらえますか？

そこでお話を聞かせてもらいます」

「お話」という単語に二人はビクつく。

「どうしました？」

「「い、いえ、なんでもないです（なぜだ。何でこんなに怖いんだ！）」」

二人は何でビクついたのか自分でわかっていなかった。

「では、行きましょうか」

「「はい」」

ジークフリードの提案のおかげでなのはとバトルをせず
事なきを得た。

《（ここまでスムーズに進むとは・・・面白いですね・・・）》

オーディーンはそう思いながら空達と機動六課に向かった。

「空&大地 side end」

「機動六課フォワードメンバー side」

「なのはさん大丈夫かなあ？」

「ただの調査だから大丈夫に決まってるでしょ」

今、機動六課のフォワードメンバーは訓練場で

訓練（なのはがないので自主練だか）していた。

「でも次元震があつたみたいですし何かあるんじゃないでしょうか」

「こ、怖い事言わないでよエリオ君」

「でも何かあつてもなのはさんがなんとかしてくれるよ」

スバルが微笑みながら言う。

「そうね。なのはさんなら竜が出てもし使い魔にして連れてきそうなもの」

「それは言いすぎだよティア」

フォアードメンバーがこんな会話をしていると・・・

「みんな」

「なのはさ・・・ん!？」

なのはが訓練場に戻ってきた。

・・・一体の竜とロボットを連れて・・・
フォワードメンバーは当然のごとく・・・

「ええっ!?! ティ、ティア! なのはさん本当に竜連れてきたよ!？」

「冗談で言ったのに・・・本当に連れてくるなんて・・・」

「かつ、かつこいい」

「そんな事言ってる場合じゃないよ」

慌てていた。（約一名は見惚れているが）

「あの・・・なのはさん、みんな慌ててるような・・・」

「えっと、その姿だからじゃないかな？」

「あゝ、なるほど」

二人が人の姿になるまでこの騒ぎは続いた。

「機動六課フォワードメンバー side end」

騒ぎは収まり、今、空と大地は部隊長室の中にいた。
中には空と大地、なのは、フェイト、はやて、がいた。

「ほな、名前を聞いてもええか？」

「は、はい！俺の名前は赤城空、高校生です」

「僕は白波大地。同じく高校生だ」

《俺はジークフリードだ》

《私はオーデインでございます。以後お見知りおきを》

「うちは機動六課部隊長の八神はやて、こつちが・・・」

「機動六課スターズ分隊隊長、高町なのはです」

「私は機動六課ライティング分隊隊長、フェイト・テストロッサ・ハラオウンです」

「それで、何であんなところにおったんや？」

自己紹介が済むとはやてが本題を聞く。

《それは俺達の転送ミスだ。本当はカードが出現する場所に転送するはずだったんだが・・・》

「カードって？」

「この事だ」

空がなのは達に持っているカードを見せる。

「さっきの竜？それにこれは虫？こつちは・・・人？」

「こつちにもある」

「こつちはロボット、あと悪魔と天使？」

《その六枚の他にあと七枚を急いで集めないとならない》

「でも、カードだけやったら急がなくてもええんとちゃう？」

ジークフリードの言葉にはやてが疑問に思い、聞く。

《空と大地には話したが、カード達は実体化するんだ》

「「「「「ええ!?!」「」「」」」」

部隊長室にいた全員が驚く。

《そのために俺らは空達にそのカードの姿になってもらい、
実体化したカードを倒し、回収してもらおうと思ったのだが・・・》

「行き先を間違えた・・・という訳みたいです」

《行く所も無いのが仇になった・・・》

「そうなんか・・・」

ジークフリードと空の言葉を聞いて
はやてが俯き、そして・・・

「ここで働かへん?」

顔を上げると同時に変な事を口走った。

「「・・・はい?」「」」

二人も驚いて変な声を出す。

《確かにここにいればカードが集まるかもしれない・・・》

ジークフリードも変な事を口走らせる。

「あの、迷惑ですよそんなの」

「別にええよ。ただ・・・」

《協力してくれば・・・でしょう？》

はやてとオーディーンが怪しく笑う。

「わかつとるやないかw。で、協力してくれへん？」

「（確か、機動六課はレリッククって物を集めてるんだっけ？
ならカードもそこに出現するかもしれないな・・・）」

「わかりました。協力させてください」

大地がそう考えていると空が喋りだした。

「何も聞いてへんけどええの？」

「大丈夫、行く所が無くて困ってたんだ
それにカードを集めるのも楽になりそうだ」

「空の言う通りだ。どうせジークフリードは生活の事まで考えてな
かったらうし」

《くっ！何も言い返せない・・・》

ジークフリードが悔しそうに呟く。

「なら決まりやな。ほんならこれからよろしゅうな」

「はい！よろしくです。高町さん、ハラウンさん、八神さん」

空と大地が微笑みながら返事をする。
すると

(トントン)

空が肩を叩かれる。

叩かれた方を見ると・・・

「えっと、模擬戦しない？ちょっとこのカードと戦ってみたくて・・・」

フェイトが目をキラキラさせて大公のカードに指さしながら言った。
いや、ちよつと待て・・・これ・・・死んだ？

《大丈夫だ。修行だと思えば・・・》

「こんな怖い修行はいらないよ・・・orz」

「それじゃあ行こっつ」

こんな状況でなければうれしい台詞なのだが・・・
と思いながら空はフェイトに引きずられて逝った。

「・・・えっと、もしかなくても・・・」

状況を判断しようと大地ははやてに聞く。

「そつや・・・フェイトちゃんはバトルマニアなんや・・・」

「・・・南無三・・・」

大地はフェイトに連れて行かれた空に敬礼した。

「言ってる事とやってる事違うからっ!!」

引きづられながら突っ込む空に関心しながらその姿を見届けた。

《こんな風に事が進むとは・・・まあ、いいか・・・》

オーデインは誰にも聞こえないように呟いていた。

ファーストステップ」なのは達との対面・機動六課に協力！？（後書き）

空「おい・・・」

作者「何かな？ワトソン君？」

空「誰がワトソンか！なんだよこの展開は！

何で俺がフェイトとバトル？大地で良いじゃねえか！」

大地「いや僕に振るなよ！」

作者「いや、大公は模擬戦で元々出すつもりだったし、

それともタイタス使ってなのはと模擬戦が良かった？」

空「恐ろしい事言っな！勝てるか！」

作者「つゝ事で次回は空vsフェイトですww

勝てるわきゃねえwwww

空「く、では次回で会いましょう」

セカンドステップⅡ模擬戦?・ジークフリードのお願い(前書き)

作者「呼び方を決めました!」

空「何だいきなり・・・」

作者「いやね? いちいちジークフリードの姿の空とか

オーデインの姿の大地とかメンドイから

呼び方を決めてみました!」

大地「まあ、その方が楽そうだね」

作者「呼び方はこのようになります!」

龍皇ジークフリードの空Ⅱ G 空

キングタウロス大公の空Ⅱ T 空

英雄巨人タイタスの空Ⅱ E 空

要塞皇オーデインの大地Ⅱ O 大地

魔界七将デスペラードの大地Ⅱ D 大地

大天使ヴァリエルの大地Ⅱ V 大地

作者「こんな感じですよ!」

空「呼びやすいか?」

大地「テキトーさが満開だなあ」

作者「黙らっしゃい！では呼び方も決まっただし、」

空&大地「第二話始まります」

作者「セカンドステップって言うてよ」（泣）

セカンドステップⅡ模擬戦?・ジークフリードのお願い

「空side」

どうもこんにちわ、最近「俺って不幸?」とか思い始めた赤城空です!

(ヒュン)

空の頬を何かかすめる。

何がかすめたんだろう?

それは・・・

「ハラオウンさんのフォトンランサーだよ!こんちきしょー!」

キングタウロス大公の姿で思いつ切り空は叫ぶ。

《おいおい・・・そんな事で大丈夫か?》

「大丈夫じゃねえ!大問題だ!」

ジークフリードがネタを出し、空もそれに答える。

「もう一回行くよ!」

そして戦うのが楽しそうなハラオウンさん・・・
バトルマニア
確か戦闘狂って言われてたっけか・

《大公の姿して飛べんだから頑張れよ!》

「確かに大公の姿でも飛べるけど、早いんだよ! 攻撃が! ハラオウンさん自身が!」

空もなのはの知識はある。

しかしうる覚えであるため、攻撃パターンなど覚えてるはずもない。だから模擬戦開始時のフェイトのスピードに追い付けずボロクソやられているのである。

・・・わりくかよ!!!

《だったら大公の能力を使え!》

「能力! ? んなものあるのか! ?」

《説明面倒だから教えてなかったwww》

ジークフリードが陽気に笑いながら言う。

「お願いだからこれ終わったら全部話して・・・お願いだから・・・」

あまりにもデバイスの仕打ちが酷い為、大公の姿で空が泣きだす。大公の姿で泣かれ、ジークフリードは・・・

《お、俺が悪かった、だから大公の姿で泣くの止めてくれ・・・》

思いつきり謝っていた。

《大公の能力はすべての感覚を最大限にまであげる『超感覚だ』》

「ネーミングがありきたりだな・・・」

《だ・ま・れ！さつさとやらんとやられるぞ》

「仕方ない！ハラオウンさん！！」

いきなり名前を呼ばれ、フェイトはびつくりする。

でも今はそんなのお構いなしだ！

「見せてやる！これが俺のギャラクシーステップだ！」

「空side end」

「大地side」

どうも、最近「僕って冷静キャラ？」とか思いだした
白波大地だ・・・

「ハラオウンさん！見せてやる！これが俺のギャラクシーステップだ！」

なんかいきなり相方がほざきだした・・・

「あの～・・・あのセリフって・・・」

なのはが苦笑いで大地に聞く。

「だよな、なんか勝ってやるぜ！的な台詞はしてるもんなあ・・・
・・・さっきつか最初からやられまくってる奴が・・・」

「気にしないでください。あいつは勝てるとうわかるとあんな事を言うんです」

「それって空くんが勝つつて事？」

「いや・・・100%負けます。もう奇跡と言っていいほど・・・」

「そ、そっか・・・」

「それはええ事きいたなあ」

いきなり八神が出てきた。

どこから湧いてきたこの狸・・・

「今、失礼な事考えへんかった？」

「・・・別に」

心読んだ！？・・・八神はやて恐るべし！！

「まあええけど・・・ちょっと賭けせえへんか？」

「賭け？」

「そうや、もし空くんが負けたら女子寮に住んでもらうで〜」

「・・・はい？」

僕は八神さんのいきなりの提案に変な声を漏らす。

「・・・っゝ事は空が勝ったら男子寮に住めるって訳か・・・」

「そうゆう事や！」

八神さんが胸を張ってこたえる。

「ちなみに拒否権は？」

「無いで」

「クソっ、空は負けが決定されてるから女子寮行き決定じゃねえーか！」

「はっはっは」

八神が腰に手を当てて笑っている。

無性にむかつく・・・頼む！勝ってくれ！空！

「大地side end」

「空side」

「行くぜ！大公！『超感覚』！」

ト空が叫び、緑色の魔法陣が現れる。
それと同時にト空の感覚が上がる。

「これが超感覚・・・これならいける！」

感覚が上がった事により、
フェイトの姿を感覚だけで確認できるようになり・・・

（ガキイイーン）

「なっ！？」

横から攻撃してきたフェイトの一撃を獣槍ゲイボルグで防ぐ。

「よし！防いだ！」

これなら勝てる！

空がそう確信する。
でも・・・

「すごいね、でも次で決めるよ！
バルディッシュ！カートリッジ！」

《イエス・サー》

(ガシュン)

「あ、あれ？」

「プラズマ・・・」

「あるえー！！あれってヤバくない！？どうしよう！ジークフリード！」

《受けるしかねえだろ・・・空・・・》

「なんだよ！？」

《ショック死するなよ・・・》

「へ？」

「スマッシュャー！！！！」

ドゴオオオオン！！！！！！！！

「ぐほおおおおお！！！！」

上空を強烈な痛みが襲う。

くっ、そうか・・・大公の能力で感覚が上がったから・・・

「痛覚も上がるって事か・・・っ、使えねえ・・・」

変身が解け、そのまま空は意識を手放し倒れた。

「空side」

「大地side」

「負けてもうたなあ」

八神さんが笑いながら話しかけてくる。

嘘だと言ってくれよバーイ・・・

「ほな、女子寮で住んでもらうからなww」

《面白い展開になりましたね、大地様》

「まったく面白くない・・・」

「あ、あはは・・・」

高町さんは苦笑いしないで・・・悲しくなるから・・・
とりあえず、空が起きたら顔面に蹴り入れてやる！

「大地side end」

「ジークフリードside」

ああ、倒れちゃった・・・

まあショック死してないし良しとするかww

「えっと・・・大丈夫かな？」

ハラオウンが空に駆け寄ってきた。

《ああ、ダイジョブダイジョブ 気絶してるだけだ》

「そうなんだ・・・そんなに強くやった覚えはないんだけど・・・」

あれでまだまだと！？意外と強い攻撃だと思ったんだが・・・それほど強いってことかならこいつらに頼んでみるか・・・

《なあ、ハラオウン・・・》

「何かな？」

《頼みがある・・・》

「頼み？」

《ああ、空達を鍛えて欲しい》

「え・・・つと、何で？」

そんなの決まってる

《こいつらが弱いからだ、本来なら勝てなくとも
もつと戦えたが・・・すぐ負けた・・・》

「・・・・・・・・・・」

《だから鍛えて欲しい！この世界であいつらが実体化する前に！》

「・・・・・・・・だって、はやて」

『別にええよ？』

いきなり目の前にモニターが現れた！

・・・・・・・・びっくりした〜

『こっちはこっちで面白いもんが決まったしな〜』

「《?????》」

面白いモノ？

ハラオウンもわからないのか首を傾げる
すると・・・

『実はな？空君と大地君の部屋割りを
空君が勝つか負けるかで賭けてたんよ〜』

「《はい？》」

俺とハラオウンは変な声を出す。

《どうゆう事？》

『空君が負けたら女子寮に、勝ったら男子寮に住まわせるって内容や！』

つまりこいつは楽しんでたって事でいいか・・・

《それで空が負けたから女子寮行きという事が・・・》

『そうゆう事や！』

思いつきり爽やかな笑顔で八神が答えた

・・・空にこの顔を見せてみたいね

「つまり空達は女子寮に住むの？」

『そうや！ちなみに大地君は諦めモードやで』

まあ、部隊長が決めた事なら仕方ないんじゃないかね？
・・・とかで諦めたんだろうなあ

《とりあえず空を運んでくれないか？ここだと風邪をひくだろうか
ら》

「ふふっ、優しいんだね」

《か、勘違いするな。カードを集めるのに風邪なんぞひかれたら面倒なだけだ》

「はいはい」

小さく笑いながら、ハラオウンは空を運ぶ。

《・・・ハラオウン》

「何？」

《空達をよろしく頼む》

「うん・・・任せて

なのはにも言っておくね」

頼もしいな・・・

・・・早く空達に強くなってもらわんと困るな・・・

「ジークフリードside end」

セカンドステップⅡ模擬戦?・ジークフリードのお願い(後書き)

大地「おいこら作者・・・」

作者「な、何かなあ・・・そんな怖い顔してえゝ
かっこいい顔が大無しよ」

大地「なんで女子寮に住まにやならんだ!?!」

作者「だって面白そうだったんだもん!」

大地「・・・オーデインセットアップ!」

作者「やっべ!〇大地になりやがった!
では皆さん!次回で会いましょう!生きてたら!」

大地「フルバースト・ショット!?!」

(ドゴオオオン)

作者「ぐはあああ!?!」

サイドステップ」機動六課に仲間入り・空の不幸は続く？（前書き）

空「何このタイトル・・・」

作者「空の未来」

空「ふざけんなあ！！！！」

作者「うるせえなあゝ、デッキ作りの邪魔すんなよゝ」

空「小説を書けやー！！！！」

作者「ルナティックはこうすれば役立つから・・・」

空「無視すんなー！！」

作者「ではこんな感じで三話が始まるよゝ」

空「ガン無視かコラゝ！！！！」

サイドステップ」機動六課に仲間入り・空の不幸は続く？

「空side」

目が覚めたら知らない天井があつた
少しオレンジ色っぽいから夕方かなあ？

あれ？確か俺はハラウンさんと模擬戦してて・・・

「目え覚ましたか、この野郎」

声が聞こえ、周りを見渡すと大地がいた
・・・何か怒ってる？

「さあ、目覚めた所で・・・」

（ゴンッ！！）

「ぐふあっ！」

「俺の顔面パンチをくれてやる」

大地が思いっきり殴ってきた・・・痛えゝ

「何しやがる！痛えじゃねえか！」

「うるさい！お前のせいで女子寮で暮らす事になっちまったから殴
ったんだろうが！」

・・・は？

「えっと・・・もっかい言って？」

「何回でも言ってやる！お前が負けたせいで女子寮で暮らすことになったんだよ！」

ますます訳がわからない！？

訳を聞くと八神さんが賭けに誘ってきて、僕が負けたら女子寮に僕が勝ったら男子寮に住むという事だったらしい

うん、これは・・・

「賭けに乗った大地が悪いんじゃないか！！」

「うるさい！拒否権あったら拒否ってたわ！！」

「強制拒否すればいいだろ！？いつも宿題それで逃げてんじゃない！」

「今回は仕方ねえだろ！僕らは元の世界に戻れない、

八神さんに働かないかとの誘いが来た後でそんなできるか！」

知るかなもん！！

《ちょっと失礼します》

オーデインが割りこんできた

邪魔しないでくれ！こいつとは徹底的に話ししないと！

《大地様、空様に伝えなければならない事があつたはずですよ》

「そうだった・・・」

他にも何かあるらしい

災厄な話しなら聞かないぞ

「実は明日から機動六課で働く事になった」

ああ、それか・・・それなら俺も聞いてたからそんなに驚かない

「フォワードとして」

・・・は？

「え、えつと・・・マジ？」

「マジだ・・・お前がスターズ。僕がライティングだよ
あと部屋は高町さん達の向かいらしい」

「ごめん、整理させて」

えつとまずは・・・俺らは機動六課で働く それはフォワードと
して

うん、ここは問題無い。次が・・・

“部屋が高町さん達の向かい”

「訳分からんわー！！！！」

「《《うわっ！》》」

大地達が驚く。

つか俺が驚いとるわ！何！？撃墜されて寝てる間にこんな話が進んで驚かない奴なんているか！

しかも仕事の話からいきなり部屋の話とか順序わきまえるや！！！！

《そんなに興奮するな》

うるさい！

「まあ、そんなに元気なら行けるんじゃないか？」

「はあはあ・・・行くってどこへ？」

「何か八神さんがかなり詳しく話を聞きたいんだってさ」

なら俺もジークフリードから詳しく聞かないと・・・

また能力説明に不備があっても困るし

《そこで他の奴にも自己紹介だによ

・・・説明は苦手なんだよなあ・・・》

「何言つてんだ。あ、そうだ

空、ここでは僕らは次元漂流者として扱われるらしい」

「次元漂流者？」

《つまりは世界規模の迷子さん・・・という事ですよ》

おお、オーディーン説明ありがとう

「まあ、八神さんがいろいろやってくれるようだから大丈夫だが・・・」

「だが？」

「お礼も込めて、ちゃんと手伝わないとなあ。
僕らを住まわせてくれてるんだし」

・・・ははっ、大地は本当に律儀だよなあ
それが良い所なんだけど・・・

「フォワード達ともう話したし」

・・・へ？

「いや、シヤマルさんってすげー美人だしww」

・・・はえ！？

「大地！お前、俺が寝てる時マジ何してた！」

「機動六課の中を案内してもらって、フォワード達と会って話してた」

「うらやましい！！！！こちらまだハラウンさんとバトルしかしてないぞ！」

それなのにもうみんなと話してるって・・・

「この薄情者！」

《気絶していたお前が悪い》

確かにそうだけどあれは大公の『超感覚』のせい・・・

《耐えられないお前が悪い》

・・・orz

「ふざけてないでそろそろ行くよ」

「ちっ、わかったよ・・・はあ」

今なら言ってもいいよね？

「・・・不幸だ・・・」

「あゝい、暗いぞあゝ」

今俺らは部隊長室に向かってるんだが・・・

「うるさいよ、確かこつちだったよね?・・・」

《そちらで合っています》

「ありがとう、オーデイン」

暗い廊下を歩いていた

俺はまだ機動六課の中なんて歩いてないから大地に任せるしかない
はあ・・・バトスピが恋しいね

「とりあえず、能力の事とかいろいろ教えるよ、
また大公のようなデメリットがあっても困る」

《わかったよ、でも大公は使いによっちゃ、かなり強いぞ》

「俺がうまく使えてないと言いたいの?」

《イエス》

そんなはつきり言わんでも・・・orz

「じゃれ合いは後にして、着いたよ」

おお、着いたか

・・・今思ったら俺部隊長室に一回行っただじゃん

《フェイトにブツ飛ばされて記憶が吹っ飛んだか?》

「そんな訳ねえよ・・・今ハラウンさんを名前で言った?」

《名前で読んで良いと言われたからな》

・・・マジで気絶してた事に後悔した

「いいから早く入るよ・・・」

俺とジークフリードの会話に呆れて
大地が部隊長室に入る。

「うわっ、ちょっと待てよ」

そう言いながら俺も部隊長室に入る
すると部屋の中には

高町さん、ハラオウンさん、八神さん達の他に
ピンクのポニテ、赤毛のちびっこ、青髪ショート、オレンジツインテ
赤毛の少年、ピンクの髪のちびっこ、白いちっこい竜、
白い小人、青犬、金髪ショートの人がいた

「ほな、自己紹介やな、まずはこっちから・・・」

「シグナムだ」

「ヴィータだ・・・」

「リインフォース？です。よろしくです」

「スバル・ナカジマ二等陸士です」

「ティアナ・ランスター二等陸士です」

「エリオ・モンディアル三等陸士であります」

「キャロ・ル・ルシエ三等陸士であります、この子はフリードです」

「くきゅる」

「ザフィーラだ」

「シャマルです」

一通り向こう側の自己紹介が終わる。
つゝかフォワードメンバー達よ・・・
階級言われてもわからんわ！

次はこっちか・・・

「（大地先に行って）」

「（わかったよ・・・）」

大地が咳払いし、口を開く。

「僕の名前は白波大地だ。明日からライティング分隊でお世話になります」

よろしくお願いします」

《私はオーディーンと申します。大地様同様よろしく申し上げます》

大地とオーディーンの自己紹介が終わる

礼儀正しいなあ

「次は俺だな。俺の名前は赤城空だ。スターズ分隊に入る事になりました

よろしく」

《俺の名はジークフリードだ、よろしくだ》

こっちの自己紹介が終わる

「ほなお互いの自己紹介も終わったし、いろいろ聞かせてもらっ
」

八神さんの眼が怪しく光る
何を聞く気だ!?

「お手柔らかにお願いします、八神さん」

「そない堅くならんでもええよ?あと名前でええよ」

「え?」

「え?・・・って仲間になったんやから別にええやん」

仲間・・・良い響きだなあ・・・

とりあえず名前呼びを許してもらったからいいか

「みんなもええよな?」

八神さん・・・もといはやてが言つとみんな頷いた

「それならよろしく、はやて」

「うん、OKや、それじゃ詳しく聞こうか」

とりあえず何の質問するのか教えて」

「とりあえず空君達の目的はもうみんなには話してあるから
二人のデバイスの事でも聞こうか思っとなるよ」

ああ、それを説明しないと・・・

確かカードのスピリットに変身するとか言っていないもんね

「実は俺らもそんなにわかってないんだ」

「わかってない？でも私と模擬戦した時、うまく使ってたような・・・」

あれをうまく使ってただど！？思いつきやられまくってたろ！

「うまく使えてたのは能力を使ってたからだ」

《ほんの少しだけな、フェイトとの模擬戦で使用したのは

『超感覚』って言って、すべての感覚をアップさせる能力だ》

「能力？」

なのはが首を傾げ、聞いてくる

《そこを説明しなきゃ駄目か・・・オーディーン、パス》

《はいはい、わかりました》

面倒になったのかジークフリードがオーディーンにパスする
・・・本当にめんどくさがりだなあ

《能力というのはそれぞれスピリットが持つ力です
例えば、空様が大公の姿でフェイト様の攻撃を受け止めたのを
覚えていますか？》

「うん、覚えてるけど・・・（そんな名前だったんだ・・・）」

《あの時はさつきも言った通り、大公の能力である『超感覚』。

この能力ですべての感覚を最大限まで上げる事ができます
だからフェイト様の攻撃は聴覚で動く音を追って防いだのです》

それを聞いて、みんなが「おお！」と呟く。

《しかしスピリットの能力にはすべて欠点があります》

「欠点？」

はやてが聞いてくる。

つか、マジか！ジークフリードにも欠点あんのか！？

《大公で例えますと、感覚をすべて最大限まで上げるので
痛覚も上がります。空様が倒れたのもこれが原因です》

「なるほど」

あれは酷かった・・・全身を槍で貫かれたらこんな感じじゃね？
とか思ってたもん

「他にはどんな欠点があるの？」

《他には・・・》

そこからジークフリードの欠点、タイタスの欠点、
オーディーンの欠点、デスペラードの欠点、ヴァリエルの欠点を説
明した

《まあ後は一日に同じスピリットに変身しなければ問題ありません》

「変身したら何かあるん？」

《ええ、一日中植物状態になります》

「！！！！」

俺と大地以外、全員驚く

まあ、二回変身しただけでそれなら酷いよなあ・・・
なのは達から言ったらセットアップが一日三回しかできねえもん

「結構なリスクやなあ・・・」

「まあ、能力も良いし、必要な時だけ変身すれば良いし
そんな苦でもないよ」

大地がさらつと答える

あの・・・お前がかなりヤバイよ？

ヴァリエルの欠点で戦闘できるスピリットは二体だけだし・

「あ、あの〜・・・」

赤毛の少年・・・もといエリオが手を上げる

「どうした、エリオ」

俺は聞いてみる。

「あの・・・それってゲームで使う物なんですか？」

っ！？

「なんでわかった!？」

エリオの肩を俺はガシッと掴む

「え、えっと、カードに何か書いていたので・・・」

「・・・」

それだけか・・・もっと何かを感じたとか言っただけだった・・・

「・・・」

・・・えっと、ピンクのポニーもといシグナムがこっちを見てるよ
うな・・・

（ガシッ！）

「模擬戦をしないか？」

やっぱ来たー！！何！？この人も戦闘狂！？

「ちょっと待って！？ねえ！誰かヘルプ！」

「「「「「「「「「「ごめんなさい」「」「」」」」」」」」

裏切られました！？

つくか無理！！フェイトにやられた後だからキツイ！
なら・・・

「大地代わって！」

「だが断る！！！」

・・・まさかの親友にまで裏切られますた¥（＾０＾）／

その後、シグナムに無理やり連れて行かれ、タイタスになったけど
五秒でピチュツた・・・

俺はこの言葉がデフォルトになりそうだが・・・

「・・・不幸だ・・・」

サードステップ」機動六課に仲間入り・空の不幸は続く？（後書き）

空「何か言う事は？」

作者「・・・正直突拍子すぎたと反省してる」

空「それで？」

作者「大丈夫！ここからはズカズカ進まないから！」

空「そっちかい！もうちょっと慎重に書けて言ってるの」

作者「分かったよ、もうちょい落ちついて書くよ・・・」

空「よし！ならいいな」

作者「つゝ訳でこんな感じの反省でした」

今回は四話で会いましょう」

番外編ステップⅡ 空 vs エリオ・バトスピでバトル!! (前書き)

大地「何でいきなりバトスピでバトル？」

作者「前回、空がバトスピ恋しいって言ったから」

大地「それだけ？」

作者「実際はなのは達がバトスピしたらどうなるかな、みたいな？」

大地「さらにここで変なキャラ出すんでしょ？」

作者「うん、ギャラクシー渡辺さんみたいなキャラ欲しかったから」

大地「名前出して良いの!？」

作者「苦情来たら直すアルよ

では番外編が始まるよ」

大地「まったくこの作者は・・・」

番外編ステップⅡ 空vsエリオ・バトスピでバトル！！

「空side」

「ぐはあああ！疲れた〜！！」

俺はベッドに思いっきりダイブする

今日はマジいろいろあった・・・

異世界に呼ばれたり、なのはの世界に来ちゃったり、

フェイトと模擬戦したり、自己紹介したり、

スピリットのデメリット聞いたり、シグナムと模擬戦したり・・・

・・・俺、模擬戦ばつかじゃね？

「ここが女子寮の部屋じゃなかったらもっと楽になれたのに・・・」

大地がソファーに座りながら愚痴る

いや、賭けに乗ったのはお前だからな？

「うるさい、お前が勝てばよかったんだ」

なんて自己中心的！？

「大地はあれか！？ガイ・アスラLv4をBP勝負で倒せとか言うのか！？」

「いや、無理だから！呪撃デッキならなんとかなるかも・・・」

「だったら言うなよ！？フェイトの相手かなりきつかったんだから

「！」

「それはそれ、これはこれ」

お前は俺のおかんか！？

(コンコンッ)

俺と大地が口喧嘩しているとドアがなる
たくっ、誰だよ・・・

「はいはい、今行きます」

大地がドアに向かい、ドアを開ける
そこに・・・

「あ、夜遅くすみません大地さん」

・・・エリオだった
エリオか・・・何か用か？

「どうした、エリオ？僕らに用か？」

「はい、さっきのカードの話を聞きたくて・・・」

・・・ワオッ！エリオが興味を持つとは！？

「良かったら教えて欲しいなあ・・・」

「良いよ 中に入って」

大地がうきうきした声を出しながら答える
うわっキモっ！

「失礼します」

「エリオ・・・」

「はい、何ですか？空さん」

・・・敬語落ちつかねえ」

何かむずむずする・・・はやてもこんな感じだったのかな」

「エリオ・・・俺らは仲間じゃねえか、

だから俺と大地を呼び捨てで呼べ。敬語もいらねえ」

「えっ、でも・・・」

「いいから！俺らがむずむずする。だから・・・な？」

「それもそうだね、僕からもお願いだ」

「・・・わかったよ、空、よろしく」

俺らは気分良く頷いた。

よし！これで本当の意味で仲良くなれたな！

「それじゃ説明するよ？」

「はい」

敬語に戻りやがった！・・・ま、いつか・・・

「このカードは『バトルスピリッツ』略して『バトスピ』って言うカードゲームだ

遊び方は四十枚以上のデッキを組んでバトルするだけ

勝利条件は相手のライフをゼロにするか、デッキをゼロにするかだね」

「ライフ？」

「えっと、ライフって言うのは自分の体力と思えばいいかな」

「それがゼロになると負けなんですネ」

「そう、エリオは覚えがいいね」

「ありがとう、大地」

良い感じにちよつと砕けてきたな・・・

次はカードの説明をしようか

「次はカードの説明だ。

カードには今、六色のカードと4種類のカードがある。

一つ目は『スピリット』、俺らがみんなに見せたカードだな。

このカードは主にアタックして相手のライフを減らしたり、ブロックしてライフを守ったりするんだ」

「他にもあるんですか？」

「そうだ。二つ目は『マジック』、主にスピリットのサポートや、相手を不利にするカードだ。」

「次は『ネクスス』と言って、自分の場を有利にするカードだよ」「いろいろあるんですね」

「次は結構最近に出たカード、『ブレイブ』・・・」

「『ブレイブ』？」

「このカードは、スピリットと合体してパワーアップするカードなんだ」

「へえ」

便利だけどブレイブキラーっつーカード出てきたからメンドクなっただんだよなあ

《なんだお前ら、バトスピしたいのか？》

エリオに他にもいろいろ説明している時、ジークフリードが話しかけてきた。

いや、やりたいのは山々なんだが・・・

「カードがないだろ・・・」

《あるぞ、作られたデッキだが・・・》

「……はあ？」

「今こいつなんつった？」

「あるの？」

大地がジークフリードに聞く

《あるぞ、変身には使えないが……》

「あるんかい！！！」

ジークフリードの返答に思いつき叫ぶ
マジか！？できんのか！バトスピ！

「やろうぜ！今すぐやりろうぜ！」

「……………」

俺が興奮していると大地は顎に手を当てて何か考えていた

「エリオ、やってみる？」

「え、……はい！」

大地の言葉にエリオは間を開けてから元気よく答えた
ふむ……相手はエリオになるのか……

「大丈夫、僕もアドバイスするから」

「わかりました」

ええ、二対一？

まあ、仕方ない。エリオは初心者だし・・・

《ならデッキを出すぜ》

そう言いながら、ジークフリードが光る。

そして目の前に黒いテーブルとテーブルの上に八つのデッキ
あと・・・

「ハロ、ジークフリード！バトルするなら解説も必要だ！
という事で参上！ギャラクシーイイ・・・スター！！！」

金髪でグラサンを掛けて派手な服の奴がいた・・・

「誰？ギャラクシー？」

「いやそこは渡辺だろ」

「誰ですか？」

《アクションはおかしいが・・・

まあ、解説役みたいなもんだ》

へえ、解説役・・・いらねえ・・・

「さあ！バトスピの戦士よ！デッキを取れ！

そして勝利を掴め！スピリットが君を待っている！」

そして地味にウゼ〜・・・

「まあ、やれるんだしやるか・・・」

「・・・このデッキで戦おう、エリオ」

「デッキに関しては任せるよ」

・・・何か大地とエリオが仲良さそ〜・・・
俺も仲良くなりてゝのに・・・

「俺はこのデッキかな・・・」

俺は置かれてたデッキの中を見て、決めた。
残ったデッキはスターが回収した・・・

良し・・・

「バトルだ！エリオ！」

「はい！」

「空side end」

「解説ギャラクシースターside」

「さあ！始まった！空vsエリオ！勝つのは誰だ！
ちなみにコアに関してはジークフリードとオーディーンが

ボイド役だ！

あと俺の side だがほぼ会話文だぜ！」

「そこ！メタ発言してんじゃね！」

「空からの突っ込みが来た所で、バトル開始！」

「先行は俺がもらう、ドロー！」

・・・俺は暴かれた墓石を配置してターンエンド」

「僕のターン、ドロー！」

「（エリオ、空のデッキは紫がメイン・・・

つまりコアをはずすのが目的のデッキだ。ここは慎重に行こう）」

「（わかった。）僕はイグア・バギーをLv2で召喚。ターンエンド」

「（アタックは無しか・・・）俺のターン、ドロー
闇の聖剣をLv2で配置、ターンエンド」

「おおーつとここで闇の聖剣！」

空のデッキはまさかのブレイブキラーデッキだ！」

「（こいつマジうぜー）」

「僕のターン、ドロー」

「エリオ、ここはノーザンベアードを出して、バギーでアタックだ」

「わかった、ノーザンベアードを召喚、イグア・バギーでアタック！」

「ライフで受ける！」

(パキーン)

「ここでエリオが動いた！空の残りライフは4、エリオは5
どうする！空！」

「俺のターン、ドロー、
イビル・フィッシャーを召喚、召喚時効果によりデッキの上から
二枚オープン、

その中から一枚を手札に加え、もう一枚は破棄する。
・・・そして冥闘士バラムを召喚して、ターンエンド」

「(呪撃か・・・厄介なスピリット出しやがって・・・)
エリオ、呪撃はブロックしたスピリットを破壊する効果だ
気をつける」

「うん、僕のターン、ドロー、
イグア・バギーをもう一体出してターンエンド」

「(何か待ってんのか?)俺のターン、ドロー、
冥闘士デスカラビアを召喚、デスカラビアにイビルを合体して
ターンエンドだ」
フレイア

「僕のターン、ドロー、イグア・バギー二体をLv1にダウン、
マジック、リバイブドローを使用、二枚ドロー、

ターンエンド」

「ドロー、（そろそろ動くか・・・）」

冥騎士アンドラーを召喚、アンドラーでアタック、アタック時効果
コアが二個以下しか置かれていないスピリットを破壊する。
ノーザンベアードを破壊する。」

「しまった!」

「おおーっと、ここでノーザンベアードが破壊された」

しかしアンドラーのアタックが残っている。どうするエリオ

!

「ライフで受けます!」

（パキーン）

「これでお互いのライフは4、どうするエリオ!」

「僕のターン、ドロー、僕はブレイドラをLv3で召喚、

さらにマジック、ブレイブドローを使用、二枚ドローして

デッキの上から三枚オープン、その中にブレイブがあれば手札に
加える

ボーンローダーを手札に加えて残ったカードを好きな順番で戻して
ターンエンドです」

「（良いカードが来たけど、空も何か持ってるかもしれない・・・）」

「ドロー、イビルを召喚、効果使って、二枚オープン、
一枚手札、後は破棄、

さらにブロンズメイデン召喚、効果で一枚ドロ、
アンドレーでアタック、バギーを破壊」

「アタックはライフで受けます！」

（パキン）

「エリオのライフは残り3！大人気ない空の攻撃が止まらない。
酷い奴だ！空！」

「なんだと！この野郎！」

「エリオ、ここはアポロを出して、バラムを破壊しよう」

「うん、僕のターン、ドロ、ブレイドラをもう一体召喚。
Lv3のブレイドラをLv1にダウンさせ・・・」

「（来るか！？）」

「太陽よ、炎を纏いて龍となれ、
太陽龍ジーク・アポドラゴンをLv2で召喚！
アポドラゴンでバラムに指定アタック！」

「（今思ったけど、エリオキャラ変わってない！？）」

（ドカーンッ）

「おおっとアポロの効果でバラムが破壊されてしまった！
しかし・・・」

「暴かれた墓石の効果で一枚ドローする。」

「くっ、ターンエンド・・・」

「ドロー、ヘッジボルクを召喚、さらにアンドラーに合体。
アンドラーをLv2にアップさせ、アンドラーでアタック
ブレイドラを破壊」

「イグア・バギーでブロック！」

「空の猛攻！一気にエリオのスピリットを二体を破壊した
これをどう返す、空！」

「僕のターン、ドロー」

「大丈夫、エリオには勝てるカードがある。
そのカードでブツ飛ばしてやれ！」

「うん！僕は突機竜アーケランサーを召喚！
召喚時効果により、一枚ドローし、相手のネクサスを破壊する！
闇の聖剣を破壊！」

「何！？」

「効果説明！アーケランサーは召喚した時、デッキから一枚ドロー
でき、

さらに相手のネクサスを破壊する効果を持つ
まさにブレイブキラー対策のブレイブだ！」

「くそっ、闇の聖剣が！」

「さらにレイニードルを召喚！アーケランサーをアポロに合体！
さらにアポロドラゴンをLv3にアップ！
行け！アポロでデスカラビアに指定アタック！
アタック時効果！BP9000以下のスピリットを破壊！
アンドラーを破壊！」

「マジか!?!」

(ドカンバガーン！)

「おお!!エリオ、ここに来て空のスピリットを二体破壊！
やり返した！」

「くそつ、効果で破壊された分だけドロ」

「ターンエンドです」

「エリオ、油断は駄目だよ。場はこっちが有利だけどライフは
こっちが少ない、手札のマジックとかで翻弄しよう」

「うん、わかったよ」

「俺のターン、ドロ、ちっ
ソードルを二体、ブロンズメイデンを召喚、
ターンエンドだ」

「僕のターン、ドロ・・・っ!?!」

「うわゝ、すごいカード引いたね・・・次のターンに回そうか・・・」

「うん．．僕は光の聖剣を配置してターンエンド」

「光の聖剣！？このタイミングで！？」

「ああ．もう空選手にはドンマイってしか言えなくなっちゃた．．」

「うるせえ〜！」

「アポドラゴンでアタック！効果でヘッジホッグにアタック！さらにBP9000以下を破壊！イビルを破壊！」

「ノオオオ！！！！」

（ドゴドゴーン）

「空マジドンマイ　ライフはまだあるのにマジ不憫」

「う．．うるさい．．．」

「ターンエンドだよ」

「俺のターン、ドロー、（これなら．．．）」

俺は冥剣士ベリトを召喚、効果で相手のスピリットからコア3個取り除く

さあ、選べ」

「ここはアポドラゴンのコアを取り除くよ」

「ここでアポロドラゴンのLvが1にまで下がった！どうするんだ！空！」

「さらにアンドラーを召喚！コアはイビルから確保」

「なっ！まさか！」

「え、どうしたの？大地」

「空はアポロを破壊するつもりだ！」

「その通りだ！アンドラーの効果でアポロを破壊！
光の聖剣はLv2だと真の効果を発揮するが、今はLv1だ！」

「しまった！・・けど、フラッシュタイミング！
サジッタフレイムを使う！」

「何！？」

「ブロンズメイデン二体とソードール二体を破壊！」

「効果説明！サジッタフレイムはフラッシュタイミングに使用でき、

BP合計5000までスピリットを破壊できる。

ブロンズメイデンとソードールは共にBPが1000、

BP合計は4000、

よって四体が破壊されたのだ！」

「ノアアア！！マジックの存在忘れてた！
でも暴かれた墓石の効果で四枚ドロ！」

「アンドレーのアタックはライフで受けます！」

（パキーン）

「おおっと！とうとうエリオのライフが2つになってしまった！
ここから逆転できるのか〜！」

「ここは耐えるか・・・ターンエンド・・・」

「これはチャンスだ！今こそそのカードを召喚するんだ！」

「うん、僕のターン！ドロー！」

「さあ、大地が言うカードとは何なのか〜！」

「行きますー！」

「来い！エリオ！（っ）かマジキャラ変わってない！？）

「太陽と月の化身！今こそ世界の覇者となれ！
神星皇ストライク・アポロドラゴンを召喚！」

「ス、ストライク・アポロドラゴンだと！？」

「うつおおおお！！！！出えたあああ！！！！
ストライク・アポロドラゴン！！！！
太陽龍と月光龍の合体スピリット！！！！
ブレイブする色によって効果が変わるスピリット！！！！
その効果はどんなものなのか！！！！」

「さらに、アーケランサーを召喚、デッキから一枚ドローしてネクサスを破壊する。暴かれた墓石を破壊！」

「なっ！？俺のネクサスが！？」

「おおーっと空がフルボッコ状態だ！！！」

これが太陽と月のブレイブデッキの力かー！！！」

「あれっ！？そんな名前だったの！？」

「さらにアーケランサーをストライク・アポロドラゴンに合体！
そしてストライク・アポロドラゴンをLv3にアップ！」

「マジでフルボッコだー！！！」

「ストライク・アポロドラゴンでアタック！
アタック時効果！BP10000以下のスピリットを破壊！
アンドラーを破壊する！」

「マジで！？」

「さらにストライク・アポロドラゴンはダブルシンボル！
ライフを二つ削る！」

「何！？ライフで受ける！」

（パリンパリーン！）

「並んだー！！！！ダブルシンボルで空のライフを二つ削って

ライフを二つにした！！！どうなる空！！」

「（これはかなりの痛手・・・でも！）」

俺のターン！ドロー！

デモボーンをLv2で召喚！さらにベルゼビートをLv2で召喚！

ベルゼの効果でトラッシュの呪撃を持つスピリットを

コストを払わず召喚！バラムを二体召喚！

ベリトもLv2にアップ！」

「えっ！？」

「しまった！」

「おおっと！空の最後の大反撃！このままフルアタックか！！！」

「行くぞ！ベリトでアタック！アタック時効果！

相手のスピリットのコアを一つ外す！

ブレイドラを指定！」

「ブ、ブレイドラが！」

「効果説明！冥剣士ベリトのLv2効果、

アタックする時、相手のコアを一つ外す効果を持つ。

相手のスピリットがコア一個しか乗ってない時が効果的だ！」

「でも！」

「！？？」

「僕はフラッシュタイミングでサジッタフレイムを使用！
使用コストはストライク・アポドラゴンから確保するよ
破壊するのはバラム二体！」

「二枚もあつたのか！？」

（ドカンドカン！）

「ここでマジックカウンター！すごいぞ！
初心者と思えない！」

「僕もびっくりだよ・・・エリオがここまで強くなるとは・・・」

「しかし！ベリトのアタックが残ってるぜ！」

「ライフで受けるよ！」

（パリーン！）

「とうとう、エリオのライフが一つになってしまった！
どうするんだ！エリオ！」

「ならベルゼでアタック！」

「さらにフラッシュ！リブートコート！
疲労状態のスピリットをすべて回復！」

「な！？」

「そして回復したストライク・アポドラゴンでブロック！」

「ノオオオオオ！！！」

もうターンエンドしか無いじゃんか！！」

「僕のターン、ドロー！」

「エリオ・・・俺の負けだ・・・」

さあ！俺を撃てえええ！！！！」

「ストライク・アポドラゴンをLv3にアップ！

ストライク・アポドラゴンでアタック！

アタック時効果でデモボーンを破壊！

これで終わりだ！」

（パリンパリン！）

「決まったああ！！！！空のライフをゼロにしてエリオが勝利を掴んだ！！」

勝者！！！！エリオ！！！！」

「ああゝ、負けたゝ」

「楽しかったよ、ありがとう、空」

「二人共良いバトルだったぜ！次はどんなバトルが待っているのか！

では、第一回、バトスピバトル！これにて閉幕！

合言葉は『ライトニング？NO！スター！！！！』」

「「やっぱ、渡辺だろ！！！！」」

「解説ギャラクシースター side end」

「空 side」

いやゝ、強えゝなあゝ

あんなに強えゝのは大地とあの人以来だゝ．．．

「空！、ありがとう楽しかったよ」

「そりゃあ、何よりだ．．．

またやろうな？」

「うん！」

エリオは汚れの無い笑顔で頷いた．．．

今はその笑顔が辛いぜ．．．

「エリオ？もう遅いから部屋に戻って寝た方がいいよ？」

「そうだね、それじゃあおやすみ！空！大地！」

「「おやすみ」」

エリオが部屋から出て行く

「さて俺らも寝るか．．．」

《それじゃこれを片付けるぞ》

「よろしく、ジークフリード・・・」

今思ったらあの変な奴がいつの間にか居なくなっていた・・・
まあ、いつか

「明日は訓練一日目だから早く寝るぞ」

「りょうかい、んじゃおやすみ」

「おやすみ・・・」

そう言いながら大地が電気を消す

明日は訓練一日目、がんばろ・・・

番外編ステップⅡ 空 vs エリオ・バトスピでバトル!! (後書き)

大地「空がぼろ負け・・・」

作者「いいじゃん、結局負ける予定だったし・・・」

それに実際、書いてる時にバトスピやってるから辛いんだよ！？

やってみ？一人でバトスピやって書くのって辛いんだよ！？
その様子をそのまま書くの辛いんだよ！？」

大地「わかった、わかったから！番外編限定キャラの説明して！」

作者「むう、わかったよ・・・」

名前：ギャラクシースター

性別：男

備考：主に解説のみ

たまに過激に解説して
さらに空を弄るのが趣味

作者「こんな感じ」www

大地「このキャラ・・・大丈夫？」

作者「文句があったら消すっての」

大地「そんな事する位なら最初からするな！」

作者「つゝ事で、話し文のみの番外編でした」

また四話で会いましょう」

大地「だから無視すんなー！！！！このネタもう飽きてるって！！！」

フォースステップⅡ特に進展の無い勤務一日目（前書き）

作者「いやっほ」

空「どうした作者、とうとう頭がバグったか？」

作者「失敬な！（ハ　ハ　）１２宮？レアが８枚ゲットしたから喜んでんだ！」

空「それ・・・あんまり自慢にならないぞ・・・」

作者「え？マジ？」

空「コレクターなら９枚ゲットしてるだろうし、

興味ない奴はそれがどうしたとか笑うだろうよｗｗｗ」

作者「すでに笑ってんじゃん！」

空「それより早く始めろ！」

作者「わかったよ・・・それではフォースステップ始まります。

あつ、ひひは念話です」

フォースステップⅡ特に進展の無い勤務一日目

「空side」

「はああああ!!!!」

スバルが俺に殴りかかる。

「おりゃああああ!!!!」

それに合わせ、俺もタイタスの姿でスバルの拳を拳で受け止める

(ガンっ!!!!)

二つの拳がぶつかり火花が舞う。

いや・・・火花が舞うほどの威力って・・・

「やるね、空!」

「お前こそ!」

「はあああ!!」

スバルの拳を受け止めていると、エリオがストラードを構えて突っ込んでくる

「っ!!?・・・ふ!!」

それをギリギリの所でバックステップでかわす。
すかさずエリオに殴りかかる・・・が

「はああああ！！！！」

「なっ！？ぐふっ！」

スバルがエリオと入れ替わりで攻撃をぶちかましてきた。

くっ、スバルのパンチは結構利くなあ・・・

「空君、大丈夫？」

なのはが心配そうに声をかけてくる

いや、大丈夫かって・・・模擬戦を二日連続でやらされる身になっ
てから言って！？

つか、フェイト シグナム フォワードメンバーって模擬戦してか
なりキツイです！

そう、今俺（大地もだが・・・）は訓練で模擬戦をさせられている
なぜやらされてるかと言うと、

『同じチームなんだし、実力をわかってた方が良いと思って・・・』

と、なのはが言っていたんだけど・・・

強いです！なのはさん！

わかったから普通に訓練しょ！？何か模擬戦続きになりそう！？

「空！ヘルプ！」

いきなり大地から念話がかかる。

念話はなのはが便利だからとか言って模擬戦前に教えてくれた。

つか、ふざけんなコラ！

こっちだって大変なんじゃボケ！

「諦めてやられろ、オーバー？」

「いや！？マジヘルプ！キャロにバインドで縛られて、

今思いつきティアナに思つきり狙われてんだって……」

「スバルとエリオが連携組んで来たんで切りまゝす、オーバー？」

「待て待て待て……マジ無理！僕、模擬戦初めてだし！」

「それがどうした、黙ってやられろ、オーバー？」

「畜生め……！」

（ドカーンッ……！）

俺の後ろから爆発音が聞こえる

……ええ……どうやって爆発すんの？

そう思っているとティアナ、キャロがこっちに向かって来ていた

うわっ、マジこれ無理！俺vsフォワードメンバーじゃん……

「たあああああ!!」

「ぐはっ!」

よそ見している俺にスバルが蹴りを入れてくる
痛ってゝ! 蹴りも強えゝな・・・

「良い蹴りじゃねえか、スバル!」

《当然です》

マツハキヤリバーが答える。

いや、お前に言っただけじゃねえよ?
蹴ったのスバルだし・・・

「アルケミックチエーン!」

その言葉と同時に、キャロのバインドで縛られる。

くっ! 動けねえ・・・
たくっ・・・

「ちっこいのに強えゝな、キャロ」

「ありがとうございます、空さん」

いやゝ、こりゃマズイ

「降参だ、もう手が無いっす」

つまようじで作った白旗を振り、
俺の一言で模擬戦が終了した

「どうだった？みんなは」

なのはが聞いてくる

「みんな強いってしか言いようがないです」

「・・・い、以下同文・・・ハアハア・・・」

「そっか・・・」

なのはが納得したように微笑む

「フォワードのみんなはうまくやっていけそう？」

「・・・はいっ」「・・・」

スバル達が元気に返事をする

・・・こいつらと一緒に戦うんだよなあ・・・
足引つ張らなきゃいいけど・・・主に俺が・・・

「それじゃあ、朝ごはん食べに行こうか」

「『はい！』」

みんなが一段と良い声を出す。

そりゃそうだ、朝早くに起きて朝飯食わず訓練してんだぜ？
かなりきついからやってみろや

「大地君も寝てないで行くよ？」

「なの・・・は、・・・先・・・行つててくだ・・・さい・・・」

・・・そんなに疲れたの？俺はあんま疲れてないんだけど・・・

《体力の差だろう？》

それもそうか・・・

まあ、大地をこのまま放っておくのもなんだし・・・

「なのはとみんなは先に行つててくれ。こいつが元気取り戻したら行くよ」

「うん、それじゃお願いね」

そう言うとそのままみんなは食堂に向かって言った

「あと何分だ？」

とりあえず朝飯食いたいので、何分で起きるか聞いてみる。

「あと5・・・」

「5分？」

「五年・・・」

「長いわ！！！」

なんつーバカだ！

「なら歌ってよ、そしたら起きる・・・」

何！？その無茶ぶり！？

「ダンでよろしく・・・」

あの・・・マジ？

「・・・仕方ねえ」

こんな所で・・・しかもこいつの為に・・・
・・・ハア、鬱になるかも・・・

俺は感情を込めて歌う。

聞く人を撫でるように・・・

時に叩きつけるように歌う。

風を感じながら、朝の輝きを感じながら

・・・歌う。

心を燃やし、歌う。

「サンキュー・・・元気出たー（棒読み）」

「棒読みで返事してんじゃねえ！」

まったくこいつは・・・寝めるならちゃんと寝めやがれ！

「さてと・・・飯でも食いに行くか・・・」

そう言いながら飛び起きる

起きるならもうちょい早く起きろよ・・・
俺はまだ六課の中を回ってないんだぞ・・・

「んじゃ、行くぞー！空」

「ちょ、待てよー！」

「遅いよー」

「「すんませ〜ん」」

食堂に着いて、同時になのはに怒られた・・・
まあ、このくらいは怖くないが・・・

「んじゃ、僕はテキトーに持つてくるから先に行つてて」

「おう！」

大地が飯を取りに行き、俺はスバル達の席に行く

スバル達の席に行くとスパゲッティ？が山のように乗っていた。
・・・何これ？スパゲッティマウンテン？

「スバル・・・そんなに盛つて大丈夫か？」

「大丈夫だよ？すぐに消費するし〜」

「「「っ！？」」」

スバルさ〜ん？そうゆうのはあまり言わないで〜
女性陣達が泣いちゃうから〜

「空、お待たせ〜つて・・・何このカオス・・・」

「言わないであげて・・・」

女性陣 特にティアナが泣くから・・・

とりあえず大地に取つてきてもらったフレンチトーストに手をかける

やっぱ朝はパンだよな」

「あれ？空と大地はそのくらいで大丈夫なの？」

スバルが俺に聞いてきた。

いや、お前と比べられても困るんだが・・・

まあ、俺らの朝飯はトースト一枚のみだから珍しいのか？

「大丈夫だよ、朝は俺も大地も軽めなんだ。」

毎日夜遅くまでバトスピやって、朝はそんなに食べれなくて・・・

」

「朝はパン一枚が癖になってきたんだよ」

「そうなんだ」

スバルは納得したらしく、またスパゲッティを食べ出した
・・・マジでどこに入るんだ？あの量・・・

「空、早く食べてヴァイスさんの所に行くよ」

「え？なんで？」

「何でって・・・訓練以外では僕らは雑用係だよ？」

？そうだったけ？

「そうなんだよ！」

「心読まれた!？」

「良いから行くぞ！」

「いや、ちよつ、待って！俺完食してな」

（ズルズル）

そのまま引きずられて連行される
・・・と思ったら・・・

「ちよつとストップや」

はやてが俺を引きずる大地を呼び止めた

「なんだ？はやて、僕は仕事しに行くんだが・・・」

「こつちも仕事の話や」

ん？仕事？ファースト・アラートはもう終わってるからアグスタか？
でも早すぎのような・・・

「聖王教会の依頼で第97管理外世界“地球”の“海鳴市”に出張
に行くんや」

出張？アニメにそんなのあったっけ？
しかも海鳴市だからなのは達の故郷だよね？

「へえゝ行つてらっしゃい」

大地が満面の笑みで言う

「何言つとるん？機動六課のスターズ分隊、ライトニング分隊
あとシグナム達で出張やで？」

・・・あれ？

「・・・って事は・・・？」

「空君達も来てもらうで」

そしてはやては大地に負けない満面の笑顔で言い切った・・・

「「ええええー！！！」」

こうして俺らの初任務は出張になってしまった・・・
・・・アグスタが初任務だと思ってたのに・・・orz

フォースステップⅡ特に進展の無い勤務一日目（後書き）

空「え？出張？」

作者「うん、出張」

空「マジで？」

作者「アニメでしか知らないって設定だから仕方ないさ・・・」

空「俺らが来たせいのおり展開って訳では・・・」

作者「んな事できるか！ちゃんとある話だから！」

空「それならいいや、気にせずやってやるよ！」

作者「・・・空が熱^{バカ}血^{バカ}って設定にしてよかったよ・・・」

空「何かバカにされた気がするが・・・」

まあ、任せとけ！」

作者「ではこの熱^{バカ}血と冷静くんを応援してください！

それでは、5話で会いましょう！」

空「またな」

フィフスステップⅡ出張任務1（前書き）

作者「……………」

大地「……遅くなった言い訳を聞こうか……」

作者「……えっと、バトスピの大会に専念したり、

徹夜で武装 姫バトルマ ターズを一週間くらいやったり……

」

大地「歯あ食い縛れえ!!!!」

作者「そげぶあ!!!!」

大地「たくっ！僕の出番を考えてない癖に

こんなに投稿するのを遅らすなんて……」

作者「ぐふっ、あ、あんまり俺を傷つけないで……」

大地「とりあえずさっさと始めろ！」

作者「い、イエッサー！ではフィフスステップが始まります」

フィフスステップⅡ出張任務1

「空side」

「・・・おえええ」

今、俺ら機動六課の主要メンバーは聖王教会？の依頼で地球に行くため、
転送ポートとやらに向かっていた。

でも着くまでの移動手段はへりな訳で・・・

「汚いよ、空」

盛大に酔っていた・・・つかスバル、汚いって言っな！
まだ吐いてないだろうが！

「そんなんで大丈夫なの？」

ティアナか・・・

うん 大丈夫じゃない 大問題だ？

「リインが背中を撫でてあげます」

・・・ああ、けっこう楽になってきた・・・
リインさんどうもです！

「ホンマにだらしのないなあ」

「うわっ、出たよ、狸」

「ちよっ、誰が狸や！」

「うるさい！お前もリインを見習え！そして酔い止め持ってたらくれ！」

「文句を言うかお願いするかどっちかにしいや」

そう言いながら酔い止め薬を投げ渡してくれた

「サンキュー、はやて」

これで楽になる・・・

薬を飲むと、向こうで大地とエリオとキャラが何か見ていた
何見てんだ？

「大地く、何見てんだ？」

思った事をそのまま口に出す。

「キャラが出張先の資料を見てたから一緒に見てるんだ」

「はやてから聞いたじゃん、地球の海鳴市だって」

「こっちでは地球はどんな感じかなあって思ってたんだよ」

そーですか・・・

「魔法文化無し、次元移動手段無し・・・って魔法文化無いの？」

いつの間にかスバルとティアナが近くにいた。

「つかティアナ・・・そこを不思議がりますか・・・」

「無いよ？お父さんも魔力ゼロだし・・・」

「スバルさん、お母さんになんですよね」

「うん」

スバルがお母さん似・・・

スバルからちよつとだけ家族の事聞いたけどやっぱり・・・

「こんな大食らいが3人もいたらミッドの食糧全滅かもなww」

こう言わずにはいられて

「酷いよ、空」

「あははっ、ごめんごめん」

「でも何でそんな世界からなのはさんや八神部隊長のような
オーバースランク魔導師が・・・」

「突然変異と言うか、たまたまな感じかな？」

ぬおっ！はやて、いつの間に近くに来た！？

「あ、すみませんっ」

「ええよ、別に」

「私もはやて隊長も魔法との出会ったのは偶然だしね」

「「「へえ」」」

みんながそうなんだあの声を出す。

ん？

「ならジークフリード、俺らの出会いも偶然か？」

《……禁則事項だ……》

・・・何？そのとあるドジっ子未来人的なノリは・・・

「まあ、どうでもいつか」

「はい、リンちゃんのお洋服」

「わゝ シャマルありがとです」

ん？リンに服？

そう思って振り返ると

・・・どう見てもサイズが合わない服を持って喜ぶリインがいた・

「えっ？リインさん、その服って・・・」

「はやてちゃんの、ちっちゃい頃のおさがりです」

「いや、そうじゃなく（ではなく）・・・」

俺とエリオがハモった・

「な、何か・・・普通の人の、サイズだなんて」

キヤロ・・・笑いこらえるくらいなら笑ってくれない？

あとその狸も笑ってんじゃねえっ！

「あはっ、そういえばフォワードのみんなには見せた事無かったですね」

「「「「「ん？」「」「」「」」」」」

みんなが首を傾げる

見せた事無い？何を？

「システムスイッチ、アウトフレームフルサイズっ」

（キイイイン・・・パアン）

「「「「「「おおっ」「」「」「」」」」」

リンが光に包まれて、光が晴れたら大きくなった！？
俺も何言ってるかわからないがこれだけは言える

「大きくなったけどちっさいなあ」

（ゴスっ！）

「ノオっ！！！」

す、脛！脛蹴られた！思いっきり蹴られた！

「失礼しちゃうです！身長はだいたいエリオとキャラロくらいです」

「ああ、確かにそうだな。どっちかと言うとヴィータの方が小さ
」

（ゴンっ！！！！）

「ふっ！！！」

の、脳天・・・脳天にすごい衝撃が・・・

「次言ったらぶつつぶす」

ヴィ、ヴィータがグラブアイゼンを構え、
かなり怖い声で俺に恐ろしい事を言った

「す、すいません」

「よし」

こんな感じでそろそろヘリの旅はおしまいに近づいていった

「八神部隊長そろそろ・・・」

「うん、ほんならなのは隊長、フェイト隊長、私と副隊長たちはちよお寄るところがあるから」

「うん」

「先に現地入りしてるね」

あらら、はやて達とは別行動ですかい・・・

「なんやあ？空君は寂しそやなあ？」

何をおっしゃるはやてさん

「リインがいるから大丈夫ですよ」

「いや、何故にそうなる」

いつ俺はリインのフラグ立てた？いや、別に誰のもいらんが・・・

はやてはそんな俺の様子を笑いながら、俺達とは違う方向に向かつて行った。

失礼な奴だ！まったくもう・・・

（キイイン・・・パアン）

「はい！到着です！」

光が晴れると俺たちは自然に囲まれている場所にいた。

・・・どこじ？

「ここが・・・」

「なのはさん達の故郷・・・」

「そうだよ」

「ふふっ、ミッドとほとんど変わらないでしょう」

ん・・・確かに・・・

まだ機動六課の周辺しか知らないけど
あんまり変わらないかも・・・

「空は青いし、太陽も一つだし・・・」

「山と水と自然の匂いもそっくりです」

「きゅくるっ」

フリードが嬉しそうに声をあげる・・・可愛くね？

「確かに気持ちいいなあ、この空気」

「そうだな、湖も綺麗だし」

「うん」

「というかここは具体的にどこでしょう？
何か湖畔のコテージって感じですが・・・」

ああ、何か建物もあるもんな
めがつさお泊り系の・・・

「現地の方のお持ちの別荘なんです。

捜査員待機所としての使用を快く許諾していただけたですよ」

「現地の方？」

こっちにそんな人がいるのか？

「ああ・・・あの人たちかも・・・」

大地がポツリと呟く。

あれ？大地は知ってるっぽい・・・
つゝ事は、一期と二期のキャラかな？

そう思っていると何か大きめの車がやってきた。

「自動車？こつちの世界にもあるんだ・・・」

ティアナ？とりあえず一度地球のイメージを俺と話し合わないか？
絶対ロクなイメージしてないだろうし・・・

「なのは！フエイト！」

車からオレンジの短髪の女性が出てきて向かってくる。

ん？なのは達のお知り合い？

「アリサちゃん！」

「アリサ」

「何よ、もう・・・ご無沙汰だったじゃない」

「あははっ、ごめんごめん」

「いろいろ忙しくて・・・」

「あたしだって忙しいわよ。大学生なんだから」

「アリサさーん、こんにちわです」

「リイン、久しぶり」

「はいです」

なんだろう・・・色々いきなりすぎて付いていけない・・・

みんなもポケっつとしてるし・

「あ、紹介するね」

フェイトがこっちを向き、

「私となのは、はやての友達で幼馴染」

「アリサ・バニングスです。よろしく」

隣の短髪さんを紹介してくれた。

へえ、アリサ・バニングス・・・・・・・・
かつこよくね？名前が！

「・・・・よろしくお願いします！」「」

「うん、あ、そういえばはやて達は？」

「別行動です。違う転送ポートから来るはずですので」

「多分、すずかのところへ」

・・・・あの・・・会話に入れない・・・

いや、俺が男だから女同士の会話に入れないとかじゃなく
ただ単に入れん・・・

みんなも同じようでそわそわしていた。

そんなこんなで任務開始」

ロストロギアの搜索地域は海鳴市全般、所々移動してるようなので
スターズとライトニングは分かれて搜索

そして街の各所にサーチャーを設置、これが今回の任務らしい
地図を見せてもらったけど・・・細かいのはティアナに任せようと

「ほんなら、機動六課出張任務『ロストロギア探索』任務開始や!」

「「「「「了解!」」」」」

とりあえずガンバる・・・

・・・夕方近くで任務しゅうりょう・・・

疲れた・・・思い切り疲れた・・・

サーチャーって意外と重いんだなあ・・・つか俺荷物持ちだったよ・
orz

「そろそろ日も落ちてきましたし、晩御飯の時間ですねえ」

「晩御飯より俺は休みたい・・・」

「だらしないわねえ」

「俺はバトスピばかりであんまり運動やらなんやらしてないの!」

「誇れる所じゃ無いよね、それ」

うわーん！スバルもティアナも俺を攻めるよー
俺は頑張ったはずなのにー

「うーん？でも手ぶらで帰るのもなにかな？」

何？誰かと念話してたの？

まあ、任務中だから当たり前か・・・

そんな風に思っているとなのはが携帯を持って
電話をする。

魔法使いが電話するってシニールな光景だ。

「あ、お母さん？なのはです」

「「「え？」「」」

え？なのはのお母さん？

いや、そりゃ人にはちゃんと親はいるよな。
でも・・・

「なのは（さん）のお母さん・・・」

「そ、それは存在してて当然なんだけど」

「じゃあ、十分くらいでお店に行くから、うん、それじゃあ」

そう言い、なのはは電話を切る。

「なのはって・・・親がいたんだ・・・」

そして俺は思った事をそのまま喋ってしまった。

「ん？それはどうゆう事かな？」

言った瞬間、なのはがにこにこしながら聞いてくる。

・・・にこにこするのは良いけど・・・目が笑ってない！
そして後ろの黒いオーラがテラ怖い！

「すみません！なんでもございません！」

「ん、よろしい」

こ、怖かった・・・（泣）

「さて、ちょっと寄り道しちゃうか」

「はいです」

「あの、今お店って・・・」

「そうだよ、家は喫茶店なの」

「『喫茶翠屋』、おしゃれでおいしいお店ですよ」

「「ええっつ」「」

二人は思いつきりと言っていいほど驚いた。
そして俺はと言うとちゃんと一期と二期を見ときゃよかったと後悔していた。

フィフスステップⅡ出張任務1（後書き）

大地「あれ？空は一期と二期見てないのか？」

作者「その方が楽しそうだから」

大地「何かテキトーだな・・・」

作者「ほとんどわからないという設定も良いじゃないか

知らないキャラも大地が知ってたらいいや的な感じだ」

大地「どんだけテキトーなんだこいつ」

作者「それが俺のポリシーだ。」

大地「とりあえず捨てて来い・・・はあ・・・」

作者「えっと、できればここは駄目だなあとかこんな風にすればいいんじゃない？」

と言っ方は遠慮なく感想ください。」

大地「来るはずないって・・・」

作者「うるさいよ！（泣）」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8447s/>

魔法少女リリカルなのはStrikers バトスピと魔法の物語

2011年10月9日00時22分発行